

展望

ありのままに詠む

鈴木 竹志

私より少し年上の男性歌人では小池光、大島史洋の歌をいつも面白く読んでいます。もちろん、傾向は違うのだが、それぞれに独特の面白さがある。小池光の歌の面白さは大方の知るところだが、果たして大島史洋の場合は

どうだろうか。面白く思っている人はあまりいないかもしれない。それを証明するような歌がある。大島が小池について詠んでいる歌である。

小池くんほど面白く書けませんそうことわっている夢を見た

この歌は、第十三歌集『どんぐり』（現代短歌社）所収の歌である。身も蓋もない歌というのは、こういう歌のことを言うのだろうか。普通はこうは詠まない。詠んでも歌にはならないと思うから詠まない。では、なぜ大島は詠むのか。大島の場合は逆で、歌らしくなることにこだわらないから、こういう題材も平気で詠むのである。さらに言えば、歌が抒情的になることに、あまり意義を見出してはいないだろう。短歌と抒情は切っても切れないものだというのが、一般的な考え方だが、ど

うやら、大島は、抒情的な要素はなくとも、短歌としての自立性は確保されるということを考えているのではないかとも思う。

厨なる妻と心かよわねど酒の肴はすぐに出てる

この日ごろ腰の痛みの気になれば酒を飲みつつ楽しくもなし

吾と妻の年金振込通知書を見ている酒を飲みつつ

一首目、「心かよわねど」と言ってしまうところが、大島らしい。正直過ぎる。意外に照れなのかもしれない。だから、「酒の肴はすぐに出てくる」と詠んでしまう。これではのろけなのだが、こういう普通は歌の素材にしないことを詠むのが大島らしい。三首目などは、あされるしかない。何も「年金振込通知書」を見ながら酒を飲まなくてもいいではないかと茶々を入れたくなる。しかも自分の通知書だけではない。「吾と妻の」通知書なのである。普通は誰も詠もうとしない素材にも歌になるだけの価値はあるとも言いたい。かのように大島は詠むのである。そして、こ

ういう少しへそ曲がりな歌が私は好きで仕方ない。多分へそ曲がり同士相通ずるところがあるのではないかと、私は勝手に思いこんでいる。

では、へそ曲がりの歌ばかりかと言えはそうでもない。この歌集には抒情的な歌も多々ある。

ブランコより放り飛ばして遠く近く靴は落ちたり春の公園

雨の音しずかになりて読みすすむ蕪村の俳句なまめく如し

絵のような写真は残る若き母父にもたれてリラの花の下

激しかりし父の気性を告げし母その無念さは今にしてわかる

少年の手を引き列車見あげいる河川敷の親子なつかしきかな

いずれも一説忘れがたい歌である。二首目の「雨の音」の歌を読んで、高野公彦の「月の夜蜜の暗さとなりにけり野沢凡兆その妻羽紅（『雨月』）が浮かんできた。「雨」と「なまめく」が連想させたのであろう。

大島にとって抒情的な歌を詠むことは苦手なことではない。ただ抒情的な歌を詠むより今の自分をありのままに詠むほうが性に合っているだろう。